

# 天理参考館 ニュースレター

天理大学附属天理参考館

発行日：2008.10.6

発行：天理大学附属天理参考館

編集：広報普及

## 第59回企画展

## 20世紀ブラジル

「アマゾン先住民の暮らしと日系人の歩み」

会期 / 10月15日(水)～12月15日(月)

今年には日本人がブラジルへ移住を始めてからちょうど100年目にあたります。日本とブラジル政府は2008年を「日伯交流年」に指定して、数多くの記念イベントが両国で催されています。天理参考館におきまして、モノを通して異文化理解の一助にしたいとたくべく、ブラジルをテーマにした企画展「20世紀ブラジル」を開催します。

ブラジルは日本から見ると地球のちょうど反対側。つまり距離的に日本から最も遠い国のひとつと言えるでしょう。そうしたこともあって、私たちがブラジルに対して抱くイメージは限定的で、サッカーやカーニバルといった華やかな文化に目を奪われがちです。そこで本展は、日本ではあまり紹介されることがないアマゾン先住民の生活文化や、ブラジル日系人社会の100年の歴史に焦点を当てて、多民族国家ブラジルの奥深さをご覧ください



祭儀舞踏用カツラザルの面  
民族集団名：カヤポ 20世紀末  
高149・0cm

だこうと思いません。

一般的に「インディオ」と呼ばれるアマゾン先住民は西洋文明と接触することによって多くの伝統文化を失ってしまいました。国が画定した保護区の中で昔ながらの生活を送っている人々が今も存在します。素朴な中にも工夫を凝らした生活道具や、天然の素材を巧みに利用した装飾品などを通してインディオの暮らしを紹介します。

一方、日系人の歴史につきましては、戦前、戦中、戦後と現在に至るまでの100年の歩みを年代順に把握できるように展示します。ブラジルへ渡航する際に発行された公文書や、身の回りの材料で作られた鳴物(楽器)などは、移民の生きた歴史を物語る史料と言えるでしょう。

また、本展と連動したイベントとして、ワークショップと講演会(トーク・サンコーカン)を会期中に開催します。ブラジルに対する関心がかつてないほど高まっているこの機会に、ブラジル文化の一端に触れていただければ幸いです。



祭儀舞踏用アrikuiの面  
民族集団名：カヤポ 20世紀末  
高152・0cm

### 列品解説

日時 / 10月27日(月)・11月26日(水)

いずれも午後1時30分～

会場 / 当館 3階企画展示室

担当 / 梅谷昭範(当館学芸員)

トーク・サンコーカン

「ブラジルになぜ日系人が多いのか」

日時 / 11月22日(土) 午後1時30分～

会場 / 当館 研修室

定員 / 100名

講師 / 梅谷昭範(当館学芸員)

ワークショップ

「ミサンガを編んでみよう！」

ミサンガは、プロミスリングとも呼ばれる糸で編まれたアクセサリーです。願い事を込めながら手足に巻き、身に付けているうちに自然に切れると、その願い事が叶うと言われられています。日本にはブラジル人のサッカー選手によって広められました。

今回はこのミサンガを特別な道具を何も使わずに作ってみます。手で糸と糸を結んでいくだけで、きれいな模様のミサンガが出来上がっていきます。完成したミサンガはお持ち帰りいただけます。

日時 / 11月2日(日) 午後1時30分～

会場 / 当館 研修室

担当 / 梅谷昭範(当館学芸員)

定員 / 16名

※別途参加費が必要です。また、ワークショップ参加には、事前の申し込みが必要です。詳細は当館までお問い合わせ下さい。

天理ギャラリー 第135回展

# 「隋唐の栄華」

千数百年前の中国、  
華やかな王朝文化が花開いた…

隋・唐時代は、中国の歴史の中でもひととき華やかな印象を抱かせます。都・長安、シルクロード、唐三彩、楊貴妃、杜甫、李白と、思い起こすキーワードは枚挙にいとまがありません。日本人にとっては、遣隋使・遣唐使、また正倉院の品々もあり、特になじみが深い時代と言えましょう。隋・唐、合わせて300年以上の繁栄は中国史に限らず、世界史においてもまれと言つてよいでしょう。安定的な繁栄はさまざまな地域から人々を呼び集め、またそれらが融合して新たなものを生み出しました。まさに国際文化の爛熟です。

本展では、当館が所蔵する隋・唐時代の資料の中から、68件を選び展示します。大きく、人物俑・動物俑・器物形明器・陶磁器・鏡・その他の工芸の6つに分けて展示を構成しました。ほとんどが都・長安か副都・洛陽の周辺で発見されたものと考えられ、王朝文化にじかに触れるかのようです。また、隋から初唐、そして盛唐へとますます華やかさが増していくさまもご覧頂けると幸いです。

会期 / 9月29日(月)～11月22日(土)  
会場 / 東京・天理ギャラリー

## ◎列品解説

◇日時 / 10月13日(月・祝)・11月7日(金)  
いずれも午後1時30分から  
◇担当 / 小田木治太郎(当館学芸員)



白磁のつぼ 白磁龍耳壺  
唐(7～8世紀) 高49.3cm

## ◆◆東京・天理ギャラリー◆◆

住所 / 〒101-0054  
東京都千代田区神田錦町1-9  
東京天理教館ビル9階  
入館料 / 無料  
開館時間 / 午前10時から午後6時  
(土・祝は午後4時まで)  
休館日 / 毎週日曜日  
電話番号 / 03-3292-7025  
交通 / JR 神田、東京メトロ 新御茶ノ水・小川町・淡路町



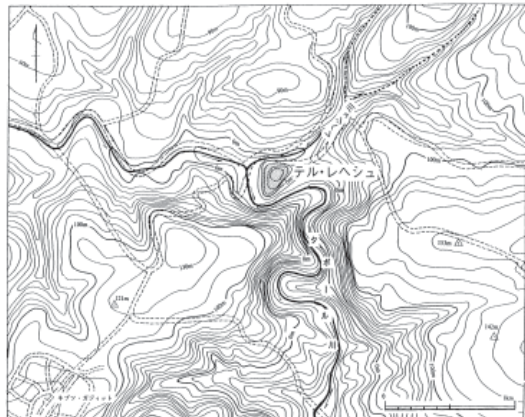
## 発掘調査 イスラエルにおける 「テル・レヘシユ遺跡②」 発掘調査(二)

テル・レヘシユ遺跡が下ガリラヤと呼ばれる地域に位置することは前回述べましたが、ここからはイエスが変貌したと言われるタボル山を北西に望むことができます。このタボル山付近に源を発したタボル川は南東に流下し、周囲の丘陵を大きく侵食しながらヨルダン川に注いでいますが、遺跡は川が大きく屈曲し、支流のレヘシユ川と合流する地点に立っています。ちょうど川によって形成された谷で西、南、北の三方を守られた格好となっています。

遺跡は南北を向く縦長の隅丸三角形を呈していて、二段になっています。長さは約350m、高さは約35mの規模の大きなものです。北が最も幅が広く約260mあります。その頂上部には80m四方の平坦面があつて、建物の壁の基礎となる石列や多くの石材の散乱がみられます。ここに遺跡の中心となる施設があつたことは間違



上空から見たテル・レヘシユ遺跡(南東より)



テル・レヘシユ遺跡周辺地形図

いありません。ここから、平坦面は南に向かって幅を減しながら緩やかに下っていきます。また、下段の西北部には幅30m程のかなり広いテラスがあります。ここからは後に新聞報道される注目すべき遺物が出土することとなります。  
レヘシユの様子を述べてきましたが、これ程の規模をもつ遺跡でありながら、これまで発掘調査が行われたことが一度もなかったというのは不思議なことです。しかし、付近のキブツ・エンドールの考古博物館にはレヘシユから採集されたといつたくさんの遺物が収蔵されていたのです。そこにはレヘシユの形成を考える上で手がかりとなる様々な時代の資料が見られました。エンドールは私たちが調査の拠点を置くこととなる集落なのですが、まず、この博物館の収蔵品の調査から始める事となりました。(日野)

周辺の見所 天理市トレイルセンター

天理参考館から南へ山辺の道沿いに進むと、桜井までの中間地点で長岳寺の山門に達します。その西隣りに日本瓦葺き建物「天理市トレイルセンター」(愛称「トレイル青垣」)があります。ここは観光情報を提供する施設で、東海道自然歩道沿いの曾爾村から京都笠置町までの四季の見所や、天理市から桜井市間の山辺の道沿いの史跡を紹介しています。さらに、写真を通して山辺の道で見られる四季折々の鳥や花を紹介するコーナーや、三角縁神獸鏡が33面出土した黒塚古墳の石室模型、布留遺跡など周辺の遺跡から出土した埋蔵文化財の展示コーナーなども設けています。天理参考館の割引引換券も置いてありますので、一度行ってみてはいかがでしょうか。ウォーキングに適したこの季節、軽く汗を流すのもいいかも。(太田)



天理市トレイルセンター

資料紹介 袈裟褌文銅鐸



出土地不詳

銅鐸は弥生時代に使われた祭りの道具で、約500個の出土が知られています。弥生時代はじめ頃には、高さが20cm程度の銅鐸が使われました。木の枝などに下げて銅鐸を棒で叩き、周囲に響く金属音を祭りの効果音としたのでしよう。その後時期が下るに従って、銅鐸は次第に大型化していきまし。弥生時代中頃の銅鐸は、高さが50cm程度となります。そして弥生時代終わり頃にかけて大型化はさらに進み、高さは60cmを超えるようになりまし。木につり下げることが不可能です。この頃には、銅鐸は金属音を伴わなくても、お祭りを行う場所に置いてあるだけで、役目を果たすようになっていたと考えられます。写真の銅鐸は、弥生時代終わり頃の大型品です。高さは1m15cm。全国で9番目と、ちよつと中途半端です。天理参考館の常設展二室では、写真の銅鐸を含め、4個の銅鐸を展示しています。銅鐸が大型化していく流れを見ることができます。(藤原)

資料紹介 インドネシア バリ島の鳥かご "サンカル"

ジャワ島やバリ島の民家の軒先では、よく鳥かご(インドネシア語で"サンカル")を見かけます。インドネシアの人、特に男性は鳥の飼育が大好きで、美しい羽を持った熱帯の小鳥や、美しい鳴声を響かせる小鳥を、目に入れても痛くないような可愛がりようで、慈しみを絶やさずに育てています。

家の軒先に鳥かごをぶら下げて鳴き声を楽しんだり、公園に飼育している小鳥を持ち寄って、鳴き声や姿の美しさを競い合つて楽しんでる光景に出会うことがよくあります。日本では高額で取り引きされているインコやオウムなどの熱帯の小鳥が、どこの家でもごく普通に飼育されていることに驚かされます。

鳥かごはシンプルなものからゴージャスなものまでさまざまです。しかし、インドネシアでは小型の鳥かごの多くはシンプルな竹ひご製の物が多いように感じます。竹ひご製の鳥かごはくちばしで突つつかれると、痛みやすいという欠点もありますが、竹藪の中で囀る小鳥のイメージとあわさつて、鳥かごには絶好の素材といえるのかもしれない。(吉田)



高47.2cm

発掘調査 リサイクルされたお墓の石

近年、桜の名所として有名になりつつある幾坂池の東側に、親里競技場があります。このグラウンドを建設するにあたり、ウテビ山と呼ばれる小さな丘が削平されました。

この丘の上にはいくつかの古墳があり、工事に先立ち昭和50年8月から9月にかけて調査を行いました。

調査が開始される頃のウテビ山の古墳は、開墾や土取業者の採土によって、すでに破壊が進み、二号墳だけがかるうじで横穴式石室の痕跡を留めていました。調査の結果、墳丘の南側から東側にかけては大きく削られていて、残った墳丘から復元すると、直径約20mの円墳と推定されました。主体部は石の抜き取り跡から判断して、全長約7mの横穴式石室で、女室の長さは約4mありました。

出土した遺物には6世紀後半の須恵器杯・土師器甕のほか鎌倉時代の瓦器があります。また、石室床面のやや上に、固く叩きしめた面があり、花崗岩を打ち欠いた剥片が多量に見つかりまし。それらの一部には石を割るときに矢穴や加工の目印となる朱線が残っていました。おそらく、石室の石材をこの場所で加工して、何かを作っていたのでしよう。もしかすると、お地藏さんや墓石をつくつていたのかも知れません。何となく罰当たりな感じがしないでもありませんね。(高野)

**公開講演会**  
**トーク・サンコーカン**

広く一般の方々に当館をさらに身近な施設として利用していただき、諸文化の理解と教養を深めていただくことを目的とする公開講演会です。講演は、いずれも午後1時30分(受付は午後1時)から当館研修室にて。受講無料(入館料が必要)。

**第187回**

**「古墳と豊穣の祭り」**

月日/10月25日(土)

講師/山内紀嗣(当館学芸員)

古墳時代の神祭りは後の神道などに受け継がれており、現在までその痕跡はのこっています。古墳時代の祭りは方形の区画を設け、そこで行われました。その代表が古墳の造出しです。また、そこに置かれた埴輪にもその祭りの様子がうかがえます。基本となっていたのは弥生時代から続く豊穣の祭りでした。また、最近よく言われます「水のまつり」とされているものも豊穣の祭りでした。その実態を解説します。

**第188回**

**「ブラジルになぜ日系人が多いのか」**

月日/11月22日(土)

講師/梅谷昭範(当館学芸員)

明治40年4月28日、日本からブラジルへ最初の移民船「笠戸丸」が781人を乗せ神戸港を出航しました。それからちょうど100年。現在、ブラジルの日系人は150万人を超え、世界最大の日系人コミュニティを形成しています。日本から見れば地球の裏側にあたるブラジルに、何故これだけ多くの日系人が暮らしているのでしょうか。

今回はサンパウロで行った最新の現地取材の報告も交えて、ブラジル移民100年の歴史を振り返ります。

**第189回**

**「アジアの屋瓦」**

中国・韓国・日本

月日/1月24日(土)

講師/太田三喜(当館学芸員)

瓦は日本で誕生したものではありません。中国や朝鮮半島にそのルーツが見られ、東南アジアやヨーロッパにおいても屋根を飾る道具としてよく使われています。ただ、瓦の形や葺き方には国によって特色があり、違いがみられます。今回は日本の屋根瓦でその歴史と特徴を学び、アジアの葺き方を追いかけてみたいと思います。

**第190回**

**「資料でたどるキップの変遷とバリエーション」**

月日/2月28日(土)

講師/乾 誠二(当館学芸員)

現在、プリペイドカードやICカードタイプの乗車券が広く利用されるようになりましたが、人びとの足を担う交通機関の発達と共に、いろいろなキップが発売されてきました。日本全国はもとより海外のキップも網羅



する館蔵資料の中から、今回は代表的なもの・珍しいものを選び、キップのバリエーションや変遷を、印刷技法も踏まえたどつていきます。

**第191回**

**「続・中国の民間版画」**

中国西部とチベットの版画工房を訪ねて

月日/3月14日(土)

講師/中尾徳仁(当館学芸員)

北京オリンピックで注目を浴びたチベット。ここでは現在も伝統的な木版画で經典が刷られています。今回は実際の木版画印刷作業の映像をご覧頂き、同時に2008年5月12日に起こった大地震前に調査した四川省綿竹市の版画工房を紹介します。

**お知らせ**  
**「関西文化の日」入館無料**

「関西文化の日」は関西(2府7県)圏域内の方々に広く美術作品や資料に接する機会を提供し、美術・学術愛好者の増大を図るとともに圏域外に向けても、文化が息づく関西を広くかつ力強くアピールして圏域への集客を図ることを目的に催されます。

当館は本年もこの趣旨に賛同し、左記の3日間無料で常設展示および第59回企画展「20世紀ブラジル ―アマゾン先住民の暮らしと日系人の歩み―」を観覧いただけます。

◇期間/11月15日(土)〜17日(月)

**利用案内**

**開館時間** 午前9時30分〜午後4時30分  
(入館は午後4時まで)

**休館日** 毎週火曜(祝日の場合は翌日)  
ただし毎月25日〜27日、4月17日〜19日、7月26日〜8月4日は開館  
創立記念日(4月28日)  
夏期(8月13日〜17日)  
年末年始(12月27日〜1月4日)

**入館料** 大人400円、団体(20名以上)300円  
小・中学生200円

**交通** 電車/JR桜井線天理駅・近鉄天理線  
天理駅下車 南東へ徒歩約30分  
車/西名阪道天理I.C.から国道169号線を南へ約3km 駐車場あり(無料)

その他 団体見学は事前にご連絡願います

**世界の生活文化と考古美術の博物館**  
**天理大学附属天理参考館**

〒632-8540  
奈良県天理市守目堂町250番地  
Tel 0743-63-8414  
Fax 0743-63-7721  
URL <http://www.sankokan.jp/>

**編集後記**

天理参考館ニュースレター第5号を発行しました。平成20年度後半に開催します企画展「トーク・サンコーカン」を掲載しました。

今号では年3回(1回は天理図書館が担当)東京で行っている天理ギャラリー展の紹介も掲載しています。(片山)